

優秀賞

## 壁に見えているものは

学校法人希望学園北嶺中学校 1年 前田 海杜

あまりにも皆と比べて不器用だったり、物事の段取りが苦手で周りとの歩調がまるで合わないことには気づいていた。なので、発達障害という診断名を告げられた時、今まで感じてきた辛さや惨めさの根拠が見つかった気がしてむしろ僕は安堵した。障害があるとラベリングされた事実が僕を守る砦になるのではないかという一縷の望みも持った。

僕は僕が嫌いだ。その場しのぎの嘘はつくし、注目を浴びたくておどけては場をしらけさせる。しかし持つて生まれた障害による特性だから仕方ないじゃないか。ありのままの僕を理解すべきだと開き直る僕に級友や先生方までも腫れ物に触るように接している事に気づくまでにはそれほど時間はかからなかった。僕は学校でどんどん孤立した。僕を守るはずの砦は、僕と社会を隔てる壁でもあるのだと気づき、愕然とした。

誰かと分かちあうことで癒される辛さもある。しかし、今僕に必要なのは孤独感に向き合い、自分自身の弱さと闘うことだ。僕の弱さは情けない自分をさらけ出せない事だ。発達障害という壁。いや、そのラベリングにおもねる肥大した自意識こそが僕にとつての壁であった。孤独感に向き合うと、その奥にある温かさ気づいた。誰かに支えてもらっている事、また、気持ちを通わせていること。家族や級友、先生方、たくさんの人達から無意識に享受してきた思いやりに今更気づく。ありがたさに胸がキュッとする。僕の不格好さも、不器用さも、それも全て僕だといつか誰かと笑いたい。僕と僕以外を隔てる「壁」に見えていたものは、乗り越えるものでも隙間をかいくぐるものでもなかった。「壁」は新たな世界へ通ずる階段の一段目だ。今はあえて僕の辛さややりきれなさ、情けなさをかみしめながら一人階段を上がる。そんな自分もまあいいじゃないか、と笑えた時、「壁」からはどんな景色が見えるだろうか。